

中国60年代と世界

第2期第10号 (通巻第17号) 2018.8.23

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会 (幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告…(1)／8月例会予稿「極権」体制と闘い続ける 廖亦武氏について…鳥本まさき(2)／今後の研究会予定…(3)／研究ノート 張成覚「反右派一大躍進一大飢饉」について(その1)…土屋昌明(4)／蔵出し批評 生きたコトバをすくい採る 書評：廖亦武『中国低層訪談録』…前田年昭(6)／胡傑監督『私が死んでも』字幕(その2)…土屋昌明編訳(7)／史料復刻 東京大学都市工学科全共闘アピール資料…解題前田年昭(15)

例会報告 (6月28日)

天安門事件検討に求められる「民主化」と「動乱」双方の視点

6月例会(2018年6月28日)は「日本人は六四天安門事件をどうみたか—文革時期との比較もふまえて」と題して土屋昌明が発言した。話は前号(第9号)の予稿にそって進められたので、ここではフロアとの意見交換を紹介したい。

発表でもっとも重視されていたのは、1989年5月16日のゴルバチョフ・趙紫陽談話で趙紫陽が「われわれは最も重大な問題を処理する場合は、必ず鄧小平同志に報告し、彼の教えを求めている」と述べた点である。この発言の事後をどう解釈するかが例会では問題となった。鄧小平の指示を仰ぐ十三期一中全会の内部的な決定を、趙紫陽はなぜわざわざゴルバチョフに話して公開したのか。この発言は、趙紫陽らが学生の要求を容れてハンストを中止させたいと思っても、鄧小平がうんと言わなければ実行できない、と解釈できる。発表者は趙紫陽の発言について、趙紫陽本人の言葉を引いて、彼の性格的な限界から来ているとみている。『趙紫陽回想録』からその部分を提示した。「(この発言は)鄧の威信を守りたい一心で述べた言葉だったのだが、それが大きな誤解を生む結果となった。人々は、この危機的な状況で、私が責任を回避し、鄧を前面に押し出し、(無理やり)民衆と対決させようとしていると思ったのだ。そんなふうに解釈されるとは、まったく予想もしていなかった」(『趙紫陽回想録』100頁)。「鄧小平に対する世間のイメージは向上するだろうと思った。少なくとも、鄧が自らの意志で権力を奪取したわけではなく、党中央委員会第一回全体会議、つまり党全体としての決定であることを明確化できるはずだ」(同前101頁)。この点をめぐって例会に参加

した矢吹晋氏は、次のように指摘した。この発言のあとに百万人デモがおこったのは、大衆の民主化運動が高まったからではなく、趙紫陽が劣勢に立ったため知識人たちが趙紫陽支持を強調し、その結果、党の中枢機関・人民日報社や國務院から大量のデモ参加者があり、それでデモは党から認知を受けたと人々が思うようになった。当時の日本ではそのようにみてなかったのではないかと、発表者の質問に対して、矢吹氏は、自分を含む『チャイナクライシス重要文庫』の編者たちは当時からそのようにみていたと答えた。

また、『趙紫陽回想録』の信頼性について、発表者は引用していちおうの信頼性を認めつつも、趙紫陽の上記のような言い訳をそのまま信じてよいか疑念が残ると感じているようであった。矢吹氏は、回想録が作られた1992年ころの趙紫陽の生活環境や録音の段取りなどの状況によれば、相応の信頼性があるが、もちろん後からの回想である点は考慮すべきだ、と指摘した。

発表者は、趙紫陽の上記の談話と、その翌日に出た敵家其の五・一七宣言とは、当時の日本の文脈では連繫したものとみられたのではないかと、つまり、趙紫陽が言い切れなかったことを秘書が代弁したとみられたのではないかと指摘した。そうすると、鄧小平おろしは趙紫陽本人の考えだと人々からは思われてしまった。両者の考えの違いをはっきりさせるべきだと発表者は考えている。これに対して矢吹氏は、当時の日本の新聞は両者を連繫したものであるかのように書いていたが、あのような状況でも、新聞記事に頼らず、ビラや発言の内容そのものをよ

く考えることから、それぞれの発言の意図を分析したと述べた。矢吹編『天安門事件の真相』上巻47～49頁では、趙紫陽と厳家其の発言をはっきり分けて検討しているだけでなく、この間の動向がどう波及したかを、「対話支持の呼びかけを行った人物と機関」「デモ参加者あるいは所属機関」「党中央機関のデモ参加状況」「厳家其ら急進知識人たちの声明、組織など」を村田忠禧編『チャイナ・クライシス「動乱」日誌』から抽出して表にまとめることで、具体的に示している。矢吹氏によれば、厳家其の宣言は、あきらかに趙紫陽の考えから逸脱していたが、趙紫陽は厳家其に責任をかぶせなくなかった点が重要だという。つまり趙紫陽は、天安門事件の名誉回復がおこなわれた場合に含みを残したのだと考えられる。

発表者は、どこからどこまでを「天安門事件」とするかという点をとりあげていたが、矢吹氏は、日本では第一次天安門事件との連想で解釈された点に注意を喚起した。つまり、いわゆる天安門事件は「天安門広場事件」と称すべきもので、天安門広場を舞台として、胡耀邦への追悼からそれ以降の一連の動向をいうが、それが、自然発生的デモで、当局から弾圧され、死者が出たという点で、いわゆる第一次天安門事件が連想された。じつは、第一次天安門事件では死者はなかった（厳家其が当事者としてそれを書いている）のに、日本の新聞では死者がいたと

書かれ、そのために両者の共通性が強まった。

また発表者は「民主化運動」という言葉を使ったが、矢吹氏はこの用語の使い方にも注意を喚起した。つまり、保守派は動乱といい、学生は民主化といい、趙紫陽は学生の言い方を評価し、党内部にも二つの立場があった。保守派の決めつけやプロパガンダだけでなく、民主化運動の側にもデマが多くあった。ゆえに「民主化」と「動乱」の双方からみないといけない。

ほかに、発表者が姫田光義氏の『中国—民主化運動の歴史』をとりあげたことについて矢吹氏は、姫田氏の構想は自身の政治思想をふまえたものであることを指摘した。

総じて、天安門事件の経緯についての発表者の知見は、矢吹編『天安門事件の真相』以後の資料を使いながらも、これを出るものではなく、まずは事件の基本的な把握およびさらなる掘り下げが必要だろう。もっとも、この課題は発表者だけのものではない。発表者によれば、日本人の天安門事件に対する見方を2013年にまとめた馬場公彦氏も、上記のゴルバチョフに対する趙紫陽談話の動機を不明としているとのことである。とすると、日本の学界・評論界でもこのあたりの問題は今まで掘り下げられていないのであろう。現在に近い問題こそ忘れられるということなのだろうか。（森）

8月例会（2018年8月23日）報告予稿

“極権”体制と闘い続ける 廖亦武氏について

鳥本まさき

私の机の上に『八九六四「天安門事件」は再び起きるか』（安田峰俊著、角川書店、2018年5月18日初版発行）という本がある。この本と廖亦武氏とを絡めて話してはどうか、とのサジェスションを幹事からもらい、研究会の当日には、そうした話ができればと思っている。

廖氏は最近賞を受けたいらしい。以下に、2018年8月3日の自由アジア放送（RFA）の記事（<https://www.rfa.org/mandarin/yataibaodao/renquanfazhi/hj-08032018103905.html>）を訳し、廖氏についてのひ

とまずの紹介に代えたい。

「廖亦武氏、「心をかき乱す平和——迫害を恐れぬ勇敢な作家賞」[訳注：英文、Disturbing the Peace, Award for a Courageous Writer at Risk、中文、打擾和平——不畏迫害作家獎]（RFA）」を受賞

ドイツ在住の中国の反体制 [訳注：原文は「異議」] 作家の廖亦武氏がこのほど、米国のヴァーツラフ・

ハヴェル図書館基金会から2018年度「心をかき乱す平和——迫害を恐れぬ勇敢な作家賞」を受賞した。この賞は何を意味するのか？

同基金会は、2012年に米国で設立された非営利組織で、その趣旨は著名な作家で政治上の反体制人士だったハヴェル元チェコ共和国大統領の政治文化遺産を継承し称揚することにある。同組織が同賞を設立した目的は、世界各国の強権による迫害を恐れず、ハヴェル氏の人権理念を堅持する作家を表彰することである。

廖亦武氏は、本放送局の記者の取材に応じた際、「(廖氏音声) 同賞は中国と世界とを、中国と欧州の歴史や西側の民主・自由という普遍的〔原文は「普世」〕価値とをある意味でつなぐ、最も緊密に関係づける賞である」ということを彼の受賞は明らかにしたとの認識を示した。

審査委員会は選考理由として、「廖亦武氏は中国の最も敏感な政治上の問題である「天安門虐殺」について書いたため、中国政府により何度も逮捕され、服役した。彼の作品は現在でもアンダーグラウンドの形で中国の民衆に幅広く伝えられている」と書いている。

「天安門事件」に関する影響が最も大きい廖亦武氏の作品は「大虐殺」という詩である。(以下、廖氏による朗読の音声)「時代遅れの国家機械が大胆にも疾病に反抗する人々に襲い掛かる／何の武器も持たない暴徒を何千何万と打ち倒す／プロの殺人手が鋼鉄の甲冑を身に着け、血の海で遊泳する／固く閉められた窓の下で火を放つ……」

同様にドイツ在住の独立中文ペンクラブ会長の廖天琪氏もこの「大虐殺」という詩を非常に賞賛している。「(音声) 彼のこの詩を読むと、まるで自分の目で情景の全体を見たかのようにであり、廖亦武氏の言葉と感情は非常に豊かである」。廖天琪氏は「廖亦武氏の受賞はその実績から言って当然の名誉だ」

との認識を示した。

廖亦武氏は中国大陆にいる間、長期にわたり警察のハラスメントや迫害を受けた。1990年に、彼は中国の裁判所から「反革命宣伝・扇動罪」を犯したとの判決を受け、計4年間、4つの監獄に転々と入れられた。妻、娘との離散を強いられた。廖亦武氏は2011年に中越国境地帯からひそかに逃亡し、その後ドイツに在住している。

ここ数年、海外においても廖亦武氏は断固として執筆を続け、毎年新たな書籍を出版している。例えば、2011年の『子彈鴉片〔砲弾・銃弾アヘン〕——天安門大虐殺の生と死の物語』や2016年の『毛沢東時代の愛情』などである。さらに彼の本は多言語に翻訳され、有名な国際的な定期刊行物で発表されるとともに、いくつもの国際的な大賞を受賞している。

今回の賞の審査員の1人である米国の詩人ジェイムス・ラガン (James Ragan) は選評の中で、「ハヴェル氏がチェコの「憲章77」を執筆したように、廖亦武氏も08憲章に署名した」とも述べている。廖亦武氏も、「この賞は、08憲章の署名のために努力した劉曉波氏らの人々に思い起こさせるようにという私への注意喚起だ」「(音声) 私はハヴェル氏の名前が劉曉波氏の名前と共に関連付けられていることを信じている。この賞は08憲章グループ全体にとってかなり大きな意義があると信じている」と述べた。

廖亦武氏は、ドイツにいてもなお中国の全体主義〔原文は「極権」〕体制を批判し続けており、劉曉波氏の未亡人である劉霞さんの救出を積極的に支援した。劉霞さんは今回の「心をかき乱す平和——迫害を恐れぬ勇敢な作家賞」にノミネートされた一人である。今年9月、廖亦武氏は劉霞さんと共にニューヨークにおける授賞式に参加し、シンポジウムに参加することになる可能性がある。

(記者：王允 編集：申鐸)

今後の研究会予定

10 月例会

10 月 25 日(木) 午後 7 時～ 専修大学神田校舎社会科学研究所

※ 発表者は調整中につき、おってメーリングリストで連絡します。

研究ノート

張成覚「反右派—大躍進—大飢饉」について（その1）

土屋昌明

2018年3月31日（土）午後3：00から香港の張成覚氏が来日講演をおこなった。場所は専修大学神田校舎1号館5階55教室、主催は専修大学土屋昌明研究室と〈中国60年代と世界〉研究会であった。氏の来日は、2017年6月27日に〈中国60年代と世界〉研究会で発表を行なった申淵氏の推薦を受けたものであった。

張成覚氏は1939年12月香港生まれ、原籍は広東・東莞。1941年、香港の日本占領で家族とともに大陸に移り、1958年、上海交通大学4年生のとき、反右派闘争で新疆の労働改造所に移送され、そこで大飢饉を経験した。1982年に名誉回復とともに大学卒業資格を得て、そのあと、広東で中学教員を勤めた。1988年に香港に移住。それ以後、小説・評論を執筆し、『西域恩仇記』が香港でテレビドラマ化された。

以下、張成覚氏の発言をサマライズする。

大陸中国の1959年から1961年の大飢饉について、国内外の研究は相当に豊かになった。とくにFrank Dikötterの『毛沢東の大飢饉』（邦訳副題「史上最も悲惨で破壊的な人災1958-1962」フランク・ディケーター著、中川治子訳、草思社、2011年）が注目される。これを楊繼繩『墓碑：中國六十年代大饑荒紀實』（修訂本、天地圖書、2008年。邦訳は『毛沢東大躍進秘録』伊藤正、田口佐紀子、多田麻美訳、文藝春秋、2012年）とくらべると、ディケーターの書名はピッタリである。大飢饉の罪過は毛沢東でなくて誰が請け負うのか。大飢饉の前の大躍進と反右派も、同じくこの「マルクス+始皇帝」を自認する暴君の手になった。つるの上に成った三つの毒葡萄というべきだ。

本稿は、毛沢東の巨大な罪責の分析をしながら、その罪責を認めようとしなない人々に反駁するとともに、

に、いまだに毛沢東を「理想主義者」とみる西側の「中国通」にも反対したい。

一、反右派は大躍進のために門を開いた

1957年夏の大陸中国における反右運動は現代史の重大事件であった。しかし北京の当局は真相を隠し続け、近年にいたっても学術的なタブーとなっている。

筆者は当時の被害者55万（あるいは100万）のうちの生存者の一人として、香港五七学社の同行とともに、後人が教訓として悲劇の再演をしないよう、歴史の真面目の回復に努めている。簡単に言って、反右派運動は政治的な流れのもと、毛沢東が一人で策動し、独裁を進めようとしたものである。毛沢東崇拜の心理が20年以上も続いたのは、反右派運動に出発点がある。昨年11月に沈志華教授がこの問題を論議し、彼は1956年10月のハンガリー事件から説き始めたが、筆者はもっと早くに端緒があったと考える。

ソ連共産党20大の閉幕の日に、フルシチョフが7時間にわたる秘密報告をおこなった。そこでスターリンは「歴史的な凶暴残虐な犯罪者」とされた。その粛清の凄惨さと徹底性はよく知られている。これに対して毛沢東は、「スターリンの統治の暗黒さは、歴史上のいかなる専制暴虐に劣るものではない」と言っている（56年4月25日、「論十大関係」の語、正式発表のときには削除された）。筆者はそのとき高校三年の学生で、他の人と同じくソ連を天国のように思っていたから、この話には驚かされた。半年後の10月23日にハンガリーの首都で大学生がデモをおこなった。フルシチョフのスターリン批判は、画期的な意義があったが、彼自身はソ連共産党から離反はできなかった。それゆえ、ハンガリー動乱に介入した。そのプロセスで彼は毛沢東に相談した。周恩来がハンガリーに派遣されたという話もある。

11月4日に事件は終息し、ナチは逮捕され、翌年6月16日に絞首刑になった(90年代に「蘇東波」で名誉回復された)。

こうして、ソ連社会主義の暗黒部が大いに露見し、中国の知識人に再考をもたらしした。

二、実利的な中共「八大」路線

1956年9月15日～27日に挙行された「八大」は、社会主義革命は基本的に完成したとみて、任務を経済建設に向けた。毛沢東は賛意を示したが、内心では階級闘争重視を堅持していた。この点で劉少奇の「政治報告」とは一線を画していた。

もう一つ、毛沢東は周恩来が総合的な建設方針を出したのにも関わらなかった。それで、1956年6月20日『人民日報』社説「要反対保守主義、也要反対急躁情緒」について「読みたくない」とコメントした。

三、毛沢東はプチ・ハンガリー事件をおこして主導権を奪回しようとした

毛沢東は「みんなは「八大」を擁護して私を擁護しない」とつぶやいていた(1956年12月、中常委に対する談話)。そのまえ、10月1日の天安門の国慶節でも、八大での決議を不適切だと語り、劉少奇が決議はすでに公布されているのに、何を今さらと意を伝えても、毛沢東は答えなかった。

毛沢東はハンガリー事件を国内で起こして、それを口実にして「八大」の政治路線を全面的に変えようとした、という説がある(中央党校哲学教研部主任、全国馬克思主義学会理事である許全興の観点。馮治軍『劉少奇與毛澤東』皇福圖書、295-298頁)。

四、

①一月省市自治区党委書記会議(1957年1月18日～27日)

毛沢東はこの会議の席上、清華大学学生が「いつか何千万人も殺してやる」と言ったという話を出し、「資産階級、民主党派…彼らは世故に長けており、今でも隠れている」「教授のなかには、共産党はいらない、共産党は自分たちを指導できない、社会主義はだめだ、といった議論がある……これらは復辟を狙っているのではないか」「ハンガリーには良い

ところがある。それによって、こうした蟻どもを穴から出させてくれる」と述べている(1月18日)。

②二、三月の最高國務會議と全国宣傳工作會議

最高國務會議(1957年2月27日)、毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」(6月19日正式発表)、全国宣傳工作會議(1957年3月6日～13日)。正式発表のときは、反右からすでに10日あまり経っており、人々は事前に広まっていた録音と内容が違うことに気がついた。以下は新たに付け加えられた部分である。「プロレタリア階級とブルジョア階級のあいだの階級闘争、各派の政治力のあいだの階級闘争、プロレタリア階級とブルジョア階級のあいだのイデオロギーの面での階級闘争は、長時間で曲折があり、ときには激烈ですらある」「社会主義と資本主義のあいだの勝ち負け問題は真正には解決していない」。

いわゆる「六条の標準」ももともとは無かった。この「六条の標準」とは、党の指導、社会主義の道、人民民主専制、民主集中制、各少数民族人民の大団結とインターナショナルイズムである。これらが香草と毒草という非法律概念で区別されることになる。

右派がどの程度いるかについて、毛沢東の見方も変化した。6月29日には、「全国でだいたい4000人前後」(「關於爭取団結中間分子的指示」に対する批示)だったのが、7月2日には、鄧小平が全国で8000人と称して、毛沢東がこれを認めている。10月15日の中共中央「關於划分右派分子標準的通知」においてもはっきりしていない。結局、右派にされた人々は552877という数字になった。1978年の55号文件で右派を「改正」する基本数がこれで、うち96人は改正されず、錯誤率は99.2783%に達する。

中国共産党全国宣傳工作會議(1957年3月6日～13日)では、2月27日の講話と同じく、毛沢東は大鳴大放を唱え、整風を勧めた。翻訳家の傅雷は毛沢東の話に感銘を受け、イギリスに留学中の息子に感激の手紙を書いている(1957年3月18日「致傅総」)。あとで自分が右派にされ、夫婦で自殺したことの伏線となっている。

毛沢東「事情はまさに変化を起こしている」(5月15日)、これは「劉、周、朱、陳、彭(真)」に見せ

ており、鄧小平が入っていない。鄧小平は起草に関わっていたのか、今でも謎である。

事情の変化については黄秋耘の回想が参考になる。「彼（邵荃麟）が受話器をおろすのをまって聞きました。「誰からだったんです」。私は彼が答えないだろうと思ってました。「周揚からだ。風向きが変わった」。まさしく“機密”が漏らされたひとと言でした。その時、5月18日には、よそではまだ大鳴大放が続けられていて、誰も一気に反右派へと転換していくことを知らなかったわけです。それは極秘事項でした。「どうします」と聞いたら、彼は「君は帰ったら、絶対に何もしちゃいかん。文章を削るとか、版面を差し替えるとかいったことは、一切しちゃいかんぞ。たとえ君が何かしても間に合わんし、間に合ったとしてもやっちゃいかんのだ。何かしたということは君が事情を知っていたということだから、必ず上から厳しく追及されて、えらいことになる。私も同罪だ。アハハハ、まさに“反党同盟”だね。すぐに帰ったが、もう九時を過ぎていました」（『文学路上六十年—老作家黄秋耘』（上）『新文学史料』1998年第1期、人民文学出版社刊、121頁）。

毛沢東の「事情はまさに変化を起こしている」ではじめて「右派」という概念が出され、「敵を深く導き入れて殲滅する」と言っている。反右の綱領的文章といえよう。また、「右派のきちがいじみた進攻」というのは明らかにでっちあげである。「魚釣りを恐れる」という語が文中にあり、5月中旬でもまだ人々は「魚釣りを恐れる」というからには、鳴放では大逆不道の言は極めて少なかったことがわかると黎澍は述べている。右派の大物は5月下旬から顔見せとなったのである。

（つづく）

蔵出し批評

生きたコトバをすくい採る 中国「低層」民衆の第一級の“魂の叫び”

書評：廖亦武『中国低層訪談録 インタビュー—どん底の世界』

前田年昭

著者・廖亦武は、八九年六月の天安門事件の犠牲者を鎮魂する詩作により反革命煽動罪で四年間投獄された経歴をもつ。出獄後、定職に就けず、簞を奏で自作詩を詠ずる大道芸を生活の糧としながら、中国の最底辺の人びとを訪ね歩き、まとめた聞き書き——それが本書である。

どういう人たちから聞き書きしたのか、抜粋して紹介すると——浮浪児、出稼ぎ労働者、乞食、麻薬中毒者、不法越境者、同性愛者、人買い、トイレ番、死化粧師、老地主、老右派、老紅衛兵、スパイ、法輪功修行者、地下カトリック教徒、チベット巡礼者、破産した企業家、冤罪の農民、反戦の反革命分子、「六・四天安門事件」反革命分子……。

文字とコトバを独占して書き散らし喋り散らしている「知識層」からみればおよそ“了解不能な”“狂気の”コトバが歴史の証言として記されていること自体がおぞましいかもしれない。しかし、ここに記された証言は、めざましい経済発展や華やかなオリンピックと無縁な、文字とコトバを奪われ“存在し

ない者”とされつづけてきた、十四億人のうち十億人を超える中国の“低層”の人びとの記録である。

文革期に世界革命を夢見てミャンマーに越境した老知識青年は、すでに異国に骨をうずめた戦友を語り、「死化粧師」は大躍進期の“食人”から文革の武闘の犠牲者までを見送ったと話す。“国境”や“道徳”から「はみ出し」た立場から視える世界が聞き書きを文句なく豊かで面白いものになっている。

女遊び・唐東昇は文革で「民衆は、みんな自分の性本能を偶像崇拜に転移していた。……文化を消滅し、同時に、性病も根絶した。空前絶後の奇跡だった」と語り、乞食の大将・劉大東は「今じゃ、労働人民は主人公なんかじゃねえ。風水が逆さまに流れているんだ。どうせ苦力は卑しいんだから、徹底的に卑しくなればいい。改革開放ってのは、俺の考えでは、男は乞食になって、女は娼婦になるってことだ。それで貧しさから抜けだせれば、金持ちになる」と喝破する。

正史、教科書に書かれた歴史は、「強い者が勝つ、

勝ったものが正しい」といいくるめる歴史にすぎない。隋の初代皇帝・文帝は歴史を書くことを禁じ、後漢の班固は『漢書』執筆が本格化する前に投獄されたという。正史に対して叛史があるなら、負けながらも抵抗精神を失わず生きる人びとの喜怒哀楽も含めた言葉の蓄積がそれにあたるであろう。

老紅衛兵・劉衛東は、いまや全否定され語ることすらタブーになった文化大革命を賛美してこう言う。

「わしの青春、夢、熱狂とロマンは、みな文革にかかわっている。おまえがどう思おうとも、少なくとも文革初期の一、二年間、人民は十分な自由を、ひいては絶対的な自由を享受したんだ。不自由なのは、走資派で、高級幹部の子弟で、特権階層だった。やつらはふだんは高いところにいて、民間の苦しみなんか知らんぷりをしていた。しかし、今やいかなる政治運動とも異なり、世界が逆転し、やつらにもプロレタリアの鉄拳の味を教えたのだ」

非情な格差社会を逞しく生き抜く中国の「低層」の人びとの証言は、同じように、個としてバラバラに格差社会に投げ出された日本の私たちの心にひび

く。いやそれ以上だ。この狂気こそ正気、叛史こそ正史なのだ。“無告”の民の生きたコトバをすくい採り得たのは、著者が信念をもって闘いつづけている詩人であり、すぐれた“道化”だからであろう。

明治維新に際して、吉田松陰は狂夫、高杉晋作は狂生を名のり、激動と混乱の政治の季節には正面切って“狂”を肯定した。旧価値観の衰えに焦る旧体制側は抵抗者に“狂”のレッテルを貼って切り返した。格差社会・中国は現在の日本と同様、価値観が混乱し、激動と混乱、変革の前夜にある。

一読をすすめたい。

廖亦武 著、竹内実 日本語版監修、劉燕子 訳

『中国低層訪談録 インタビューとん底の世界』

A5判・424頁・4830円

集広舎 発行（中国書店 発売）

978-4-904213-00-1

〔『週刊読書人』第2744号 2008年6月27日付掲載〕

胡傑監督『私が死んでも』 字幕（その2）

土屋昌明 編訳

〔前号からのつづき〕

34

王晶焄：（读胡志涛遗著《生活教育论》）1966年8月5日、大约下午一点半钟，游斗在校园里开始了。无数只拳头随“打倒黑帮”的口号声落在我的身上，接着推推搡搡把我带到操场的中心。

王晶焄：（胡志涛の遺著『生活教育論』を朗読）「1966年8月5日、午後1時半頃、見せしめのつるしあげが大学構内で始まった。「人民の敵を打倒せよ」のスローガンの声とともに、無数の拳が私の身体に打ち下ろされた。続いて、こづき回しながら私を運動場の真ん中に連れて行った」。

35



（林莽：师大女附中劳教人员）

（林莽：師範大学付属女子中学・高校で労働教育を受けた経験者）

（照片：师大女附中女学生）

（写真：師範大学付属女子中学・高校の女子学生）

林莽：哎呀！她们脸上都是黢黑的，只有牙齿是白的，其它一脸全是黑的。

胡杰：涂的墨汁，是吧？

林莽：墨汁呀！就是眼睛可以算看得见，还有牙齿。喊，嚎叫，嚎叫啊，她要声音不大，就一棒子打过去啦。叫的声音不响不行呢。大声叫！“叭”一棒子捅过去。

胡杰：她们都说些什么呢？

林莽：她们就说，我是走资派！我是反革命修正主义！我该斗！我该死！就讲这些，我亲耳听见的。有的时候我该砸烂我的狗头！就这些话。而且说一句要敲一下脸盆，说一句敲一下簸箕。卞仲耘敲的是一个扫地的铁簸箕。胡志涛敲的是一个脸盆，我记得很清楚。

胡杰：旁边都是一些学生跟着她们？

王晶焄：红卫兵。

林莽：除掉红卫兵以外，老师一个都没敢出来，没有人出来，就她们。我那时候躲在实验楼，我在图书室窗子里边偷偷看的。这里面有一个场面，现在回想起我当时是很惊呀，这个女红卫兵个子比较高的。我叫你永世不得翻身，我还要在她身上踩上一只脚，真的就踩了她一下，就是这样。

胡杰：当时她倒下了，还踩上一只脚，还说让她永世不得翻身？

林莽：是。

王晶焄：穿着什么？

林莽：穿着军靴呀。几天工夫就变了样了，一些女的都换衣服了，穿什么呢？草绿色军装，解放军的军装。脚上蹬的翻的牛皮的军靴子，军人穿的靴子。就用这个东西踢人呐。就这样。

林莽：ああ、彼女ら（女子学生たちに攻撃されていた女性教職員）の顔は真っ黒で、歯だけが白く、ほかは顔中真っ黒だった。

胡杰：墨汁を塗ったのですね？

林莽：墨汁だよ！ 眼だけが何とか分かるくらいで、あとは歯だ。大声で叫ばせていた。声が大きくないと、すぐに棍棒で殴るんだ。声が大きくなければ許さない。「大声で言え！」と言っては、棒で突く。

胡杰：女性教職員たちは何と言っていましたか？

林莽：「私は走資派です！ 反革命修正主義です！ 批判されるべきです！ 死ぬべきです！」というようなことだ。私はこの耳で聞いたんだ。時には「私はこの犬みたいな頭を打ち碎かれるべきだ！」というような言葉も。しかも、ひとこと言っただけ洗面器

で叩かれ、ほうきで叩かれていた。卞仲耘は地面を掃く鉄のほうきで叩かれていた。胡志涛は洗面器で叩かれていた。はっきり覚えている。

胡杰：周りは学生が何人かついていた？

王晶焄：紅衛兵だ。

林莽：紅衛兵以外、教師たちは一人も出てこようとしなかった。誰も出てこないで、彼女たち（卞仲耘と胡志涛）だけ。私はあの時、実験棟に身を潜めていた。図書室の窓からこっそり見ていたんだ。こんなシーンがあって、今でも覚えていて本当に驚いたんだが、その女子紅衛兵は背が高く、「永遠に立ち上がれないようにしてやる！ こいつの身体を足で踏みつけてやりたい！」と言って、本当に彼女を踏みつけにしたんだ。そんな状況だった。

胡杰：その時、彼女は倒れていたのに、更に踏みつけにして「永遠に立ち上がれないようにしてやる」と？

林莽：そうだ。

王晶焄：何を履いていた？

林莽：軍靴を履いていたんだ。数日のあいだに様変わりしてしまった。女たちは服を変えていた。何を着ていたかという、黄緑色の軍服、解放軍の軍服だ。足に履いているのは、スエードの軍靴だった。軍人が履く靴だ。そんなので人を蹴っていた。

36



全中国人民に現れ、世界は北京に日々注目する

文革記録フィルム：無限の生命力を持つ新たな物が全中国人民に現れ、世界は北京に日々注目する。

37



楊秀媛
もと北京57中教師
ベルトを履いて年取りを打つんだ

（楊秀媛 原北京57中教師）

（楊秀媛、もと北京57中学の教師）

拿着皮带，操你姥姥的，就变成这样了，我都奇怪呀。怎么一下子变成这样。

楊秀媛：ベルトをふりあげて年寄りを打つんだ。まるで変身したみたいだった。どうしていきなりあんなになったのか不思議だった…

38



(电话采访, 王友琴 美国芝加哥大学)

(電話インタビュー 王友琴 米国・シカゴ大学)

王友琴：她们五人跪的时候我听到有人喊：说到木工房去拿棍子去。就在那天打完以后我们学校的宿舍楼的矮墙上面就有一大片的血点，而且还有一个血的手印。

王友琴：彼女ら5人が跪かされている時に、誰かが叫ぶのが聞こえた、「木工場に棒を取りに行け！」と。あの日、暴行が終わったあと、うちの学校の宿舍の低い塀には、大量の血痕がついていて、血染めの手形も一つあった。

39



(师大女附中小操场照片)

(師範大学女子付属中学・高校、校内の運動場の写真)

林莽：快死之前的时候是什么时候呢？是小操场已经（折磨）完了，这些红卫兵吃冰棒，让她们劳动以后就散开了，散开以后就找我。我开头不知道找我干什么？后来才知道叫我找，因为我是打扫厕所的，要我找笤帚，把我带到女生宿舍东边女厕所。

林莽：彼女が死ぬ直前はどのような状況だったかといえば、グランドでの暴行が終わって、紅衛兵たちはアイスクャンディを食べていた。仕事が終わって解散ということで、そのあと私を探しに来た。最初は何の用だか分からなかったが、実は私が便所の清掃係だったから、ほうきを借りに来たんだ。私を女子学生宿舍の東側の女子便所に連れて行った。

40



(洗漱室 女厕所)

(洗面所 女性便所)

王晶焄：林莽看到的，卞校长在这边手扶着墙。

王晶焄：林莽が見たのは、ここで壁に手をついている卞校長だった。

41

林莽：她这个衣服上有血迹。当时我还不知道什么原因，事后我才知道，就是她游斗的时候，她们拿棍子打的时候，棍子上是钉的钉子的。

林莽：彼女の服には血痕があった。その時はどういう原因か分からなかったのだが、事後に分かったのは、見せしめのつるしあげの時に、紅衛兵たちが棒で殴った時に、棒には釘が打ってあったんだ。

42

王晶焄：红卫兵就叫林莽找一把笤帚来，意思就是让她打扫这个厕所。

王晶焄：紅衛兵が林莽にほうきを持ってこさせたのは、卞仲耘にこの便所を掃除させるためだ。

43

林莽：当我把这个笤帚交给她的时候，她还没有接住，人就从这个墙身边就溜下来了。就倒在地上了。倒在地上了就晕过去了。晕过去了有一个女生她就骂她：你装死，你刚才在小操场你装死，现在又装死。林莽：私がほうきを渡そうとした時、まだ受け取る前に、彼女はこの壁から滑り落ちて、地べたに倒れ、地べたに倒れると気を失ってしまった。すると女子学生がこう罵倒した、「死んだふりか。さっき運動場でも死んだふりをしたが、また死んだふりだな」と。

44

王晶焄：倒地以后，红卫兵就从这个漱洗里面弄了一盆水，兜头一泼。

胡杰：就这里。

王晶焄：为什么…呢？就是这个衣服上面呢，…水泼…就在那里一盆水泼到身上。

王晶焄：それから、紅衛兵はこの洗面所から水を汲んできて、卞仲耘の頭にかけてたんだ。

胡傑：ここでですね。

王晶焄：どうして……この服の上から……水をかけた…。まさにここで水をかけたんだ。

林莽：我刚把两个脚一抬起来，哈……那些女红卫兵都笑，朝着谁笑呢？不是朝着死者笑，是朝着我笑。当时我明白了，不是嘲笑一个活的右派抬死的走资派吗？让活着的右派抬死着的走资派……

林莽：両足を持って持ち上げると、わははは……と、そこにいた女紅衛兵たちがみんなで笑った。誰を笑ったのか？ 死者を笑ったのではなく、私を笑ったんだ。その時わかった、生きている右派分子が死んだ走資派を持ち上げていると嘲笑したわけだ。生きている右派分子に、死んだ走資派を持ち上げさせると……

45



林莽：就是她们没有把她连续浇醒，这是我亲眼看见的。没有多久又叫我过去，叫我干嘛呢？叫我到女生宿舍的正门，已经把她弄出来了，谁弄出来的我不知道，弄到正门的台阶上，躺在那里。另外一个工人弄了一个平板车，要我跟这个工人老伯把卞仲耘抬上车。我把两个脚地拉起来，两个脚鞋子里面都是水，但是她还没有完全死，眼睛珠子翻滚，向上翻，翻的眼白都出来了。口里边有白沫，还有血丝，还在抽搐。

林莽：それでも彼女は意識が戻らなかったで、水は続けてかけなかった。私はこの目で見たんだ。ほとんどなくして、また私が呼ばれた。どうするのかというと、女子学生宿舍の入口に行かせた。彼女はすでに運ばれていた、誰が運んだかわからないが、宿舍入口の階段に運ばれて、そこに寝かされていた。どこかの作業員が運搬用の荷車を持ってきて、その作業員の年寄りと、卞仲耘を車に乗せろと言われた。私は両足を持ち上げたが、靴は両方とも中まで水浸しだった。彼女はまだ息があり、黒目がひっくりかえって、上目になって、白目がむき出しだった。口からは白い泡が吹き出し、血が混じっており、痙攣していた。

(林莽1978)

(林莽 1978年)

46



解説：卞仲耘死前书包里面的学习文件：工作证、毛主席语录、刘少奇《论共产党员的修养》、《千万不要忘记阶级斗争》、《高举毛泽东思想伟大红旗把无产阶级文化大革命进行到底》、《横扫一切牛鬼蛇神 触及人们灵魂的大革命》、《彻底搞好文化革命 彻底改革教育制度》……

解説：卞仲耘が生前、鞆に入れていた学習資料など：身分証明書、毛主席語録、劉少奇『共產黨員の修養を論ず』『階級闘争を決して忘れるな』『毛沢東思想の偉大な赤旗を高く掲げプロレタリア文化大革命を徹底的に推し進めよう』『妖怪変化を一掃せよ 人民の魂に触れる大革命』『文化大革命を徹底的にやりとげ教育制度を徹底的に改革しよう』……

王晶焄：(读胡志涛遗著《生活教育论》)一辆平板车向我推过来在我身旁停下。你看！我一看车上盖满了上大字报，上面还压着一把大竹扫帚，我用双手拿下扫帚，又揭开大字报纸。“老卞！”我几乎叫出声来，她的两眼直愣愣睁着，已没反映，嘴巴张着，呼噜呼噜的吐着粗气。快！快！赶紧送医院。她们凶神恶煞地向我吼叫：“黑帮”你不好好的改造，也是这个下场。我被她们推搡着关进了办公室。

王晶焄：(胡志涛の遺著『生活教育論』を朗読)一台の荷車が私の前に押されてきて停まった。「見

ろ！」と言われ、ちらっと見ると、荷車は大字報で覆われていて、上から大きな竹箒でおさええてあった。私は両手で箒を下ろし、そして大字報をかき分けた。「卞さん！」私の声はほとんど叫び声になった。彼女の両目はぼんやりと見開かれ、既に反応がなかった。口を開けて、はあはあと荒い息づかいだった。はやく！はやく！すぐに病院に連れて行かなくちゃ。彼女たちは私に向かって悪魔のようにとなりつけた。「人民の敵め！おまえも心から改心しないと、これと同じ目に遭うぞ」と。そして私の襟首をつかんで事務室に押し込んだ。

47

字幕：原北京师大女附中与医院仅一街之隔。

字幕：以前の北京師範大学付属女子中学・高校は、病院と通りを隔てた場所にあった。

胡杰：当时是怎么知道卞老师出事的？

王晶焄：晚上下班回到家里，回到家里大概八、九点钟，楼上邻居有电话。

胡杰：你去接电话的？

王晶焄：唉，接电话。是学校里面的人事干事告诉我，说卞仲耘在医院受伤了。所以就去了。就带着三个小孩子，小的孩子去了。

胡杰：その時、卞先生の身に異変があったことはどのように知ったのですか。

王晶焄：夜に仕事から戻って、八時か九時頃だったが、電話が入ったと上の階の住人から呼ばれた。

胡杰：電話に出に行行った？

王晶焄：ええ、電話に出たら、相手は学校の人事担当者で、卞仲耘は怪我をして病院にいと教えてくれた。それですぐに向かった。三人の子供を連れ、下のチビもつれてすぐに向かった。

48

字幕：1966年8月5日 夜。

字幕：1966年8月5日、夜。

王学：（王晶焄長女）等一到那儿的时候，我父亲和

弟弟妹妹已经在那儿了，他们就在邮电医院一进门左手边那个小房间里。

王学：（王晶焄の長女）私が駆けつけるまでに、父と弟と妹はもう来ていた。郵電病院の入口左手の小さな部屋にいた。

49

王晶焄：革委会成员，他们几个人就出面，负责人，就是革委会成员，你看，师大女附中，这是原件。李松文，是个教师，唯一的一个教师。

王晶焄：革命委員会のメンバーが数名が来ていた。責任者は、革命委員会のメンバーだった。ほら、師範大学付属女子中学・高校、これが原本だ。李松文、この人だけが教師だ。

50



王学：母亲的头上，右边的头的后部一个窟窿，右臂上臂也是一个血窟窿，那个血还在往外渗，当时没看见下半身，就是脸上都是浮肿，后来我就和父亲到另外一个房间，我们俩个就抱头痛哭。内裤上就有大便。

王晶焄：唉，对对对！

王学：大便。当时爸爸看到这个以后，就不能控制自己。就在他的小房间里就扒在地上，当时夏天嘛，铺着席子，他就把那个席子用嘴啃了好几口，啃烂了。

王学：母の頭は、右側の後ろが陥没していた。右の上腕にも血だらけのくぼみがあり、血がまだ外に流れていた。その時、下半身は確かめなかったが、顔全体がむくんでいて。それから私は父と別の部屋に行き、抱き合って泣いた。下着の中に（失禁して）大便があった。

王晶焄：ああ、そうだった！

王学：大便です。父はそれを見て、自分を抑えきれなくなった。床に突っ伏すと、当時は夏でむしろが敷いてあったが、それを何度も口で噛みちぎって、ぼろぼろにしてしまった。

51

(王来棣, 中国社会科学院近代史研究所 学者)

(王来棣 中国社会科学院近代史研究所 学者)

王来棣: 王晶垚说着说着, 就流眼泪。

胡杰: 您和他在一个办公室吗?

王来棣: 对, 我同他是一个办公室, 我们很熟的, 所以他这个情况告诉我们, 我们都很同情他, 觉得这个运动怎么搞成这样? 把这些孩子都弄的这么野蛮, 怎么可以把老师打死, 这个好像是过去从来没有听说过的。

王来棣: 王晶垚は話しながら、涙を流していた。

胡傑: 彼と一緒に職場だったのですか?

王来棣: そう、同じ事務室で、仲の良い同僚だった。だからその話を聞いて、とても同情した。なぜ運動がこんなふうになってしまったのかと思った。何があの学生たちをこんなに野蛮にさせたのかと。教師を殴り殺すなんて、あり得ない。こんなことはそれまで聞いたこともないことだ。

52

王晶垚: 我不能去单位了, 我就给当时我们所里的造反派头头写个请假信, 德信同志: 他姓张, 叫张德信, 他是革委会负责人。在文化大革命运动中, 在对待叛徒、反革命分子祁式潜的问题上, 我犯了错误, 性质是严重的, 我决心彻底和这个反革命分子划清界线, 彻底揭发, 彻底检查, 完全回到革命立场上来。昨晚回家知道发生了一件事情, 我爱人死了。因此需要请几天假处理后事, 我可能也要休息一、两天, 拟请文化革命小组批准, 并向支部请假。

王晶垚: 私は職場に行けなくなった。それで研究所の造反派リーダーに休暇願を書いた。「德信さま」。彼は張德信といい、革命委員会の責任者だ。「文化大革命の運動において、反逆者・反革命分子祁式潜に対する問題で、私は間違いを犯しました。その問題は深刻なので、私は革命的立場に完全にたちもどるために、この反革命分子と徹底的に訣別し、徹底的に告発し、自らを徹底的に反省したいと思います。昨晚帰宅して、私の妻が死んだことを知りました。

そこで数日間、事後処理にあたらせていただき、その後一日か二日ほど休暇を頂きたく存じます。文化革命小組の許可を頂きたく、支部に休暇を申し出る次第です。」

53

胡杰: (後補的) 王晶垚老師他有一個非常讓人震撼、震驚的舉動是, 他妻子被打死以後, 他第二天就買了一個照相機, 把他妻子的遺體拍下來, 您知道這件事嘛?

王來棣: 不知道。他從來沒同我們說過。我就知道他就是很傷心。

胡傑: 王晶垚先生はたいへん驚くべき行動を取りました。妻が殺されたあと、翌日にカメラを買って、遺体を撮影したのです。ご存じでしたか?

王来棣: 知らない。私たちには話したことがない。彼がとても悲しんだのは知っていたが。

54

(电话采访, 王友琴 美国芝加哥大学)

(電話インタビュー 王友琴 米国シカゴ大学)

胡杰: 第二天知道卞老师被打死以后, 大家有什么反映吗?

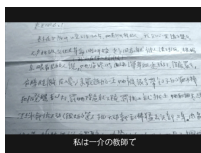
王友琴: 就是第二天早上, 学生都坐在教室里, 当时每个教室都有一个有线喇叭。当时文化革命委员会的副主任, 是一个高三学生, 也是红卫兵负责人之一, 在广播喇叭里说: 昨天晚上卞仲耘死了。教室里当时好像静了一下, 然后有人好象议论了几句什么, 然后话题很快就转到别处去。好像死了一个人她是牛鬼蛇神, 她被打死了根本就不被当做一件事情, 甚至不需要被议论一下。

胡傑: 翌日、卞先生が殺されたと知って、みなさんはどんな感じでしたか?

王友琴: 翌朝、我々学生が教室にいと、当時は各教室に有線スピーカーがあって、文化革命委員会の副主任で、紅衛兵の責任者だった高三の学生が、放送でこう言った。「昨晚、卞仲耘が死んだと。教室はちょっと静かになったが、それから誰かが一言二

言議論していると、すぐに話題は別のことになった。死んだ」のは妖怪変化であり、殺されたからといってまったく取り立てるべきことではなく、議論にも値しないという感じだった。

55



(匿名信：1966年8月8日)

(匿名の手紙：1966年8月8日)

胡杰：这是谁写的唁函？

王晶焄：这个事情现在还没有…迷还没破解。

王晶焄读信：老王同志：老卞在女附中为党工作十七年，她是什么样的人，我们心里清清楚楚，无产阶级文化大革命刚刚开始，老卞同志就被活活打死，据亲眼看见的人说，她被很多带钉子的粗木棒和板凳腿乱打，罚下跪，罚挑土，挑不动就乱棒猛击头部、上身，她后来又被罚去扫厕所，刚登上第三层台阶，她就一头倒在宿舍楼的台阶上，当时大小便失禁，我是一个普通的教师，我不愿意写下我的名字，也不愿暴露我的笔迹。师大女附一教师。八月八日二时。

胡傑：これは誰が書いた手紙ですか？

王晶焄：それは今でも、謎が解けていない。

王晶焄が手紙を朗読：「王さん。卞さんは付属女子中学・高校で、党のために17年間働いてきた。彼女がどんな人か、私たちは言わなくてもはっきりと分かっている。プロレタリア文化大革命が始まったばかりで、卞さんは無残にも殺されてしまった。その場を見た者によれば、釘を打ちつけた太い棒きれや腰掛けでメッタ打ちにされ、跪かされ、土を運ばされ、運べなくなると頭や上半身を殴られた。その後、彼女は罰として便所掃除させられ、宿舍の階段の三段目に足をかけたところでもんとり打って倒れてしまい、その時、大小便を失禁したという。私是一介の教師で、自分の名前は書きたくないし、筆跡も変えてある。師範大学附属女子中学・高校の一教師より。8月8日2時」。

56



广播电台播音员（原始资料）：《中国共产党中央委员会，关于无产阶级文化大革命的决定》。（一九六六年八月八日通过）

一 社会主义革命的新阶段

当前开展的无产阶级文化大革命是一场触及人们灵魂的大革命，是我国社会主义革命发展的一个更深入、更广阔的新阶段。毛泽东同志在党的八届十中全会上说过，凡是要推翻一个政权，总要先造成舆论，总要先做意识形态方面的工作。革命的阶级是这样，反革命的阶级也是这样。实践证明，毛泽东同志的这个论断是完全正确的。资产阶级虽然已经被推翻，但是，他们企图用剥削阶级的旧思想、旧文化、旧风俗、旧习惯来腐蚀群众，征服人心，力求达到他们复辟的目的。无产阶级恰恰相反，必须迎头痛击资产阶级在意识形态领域里的一切挑战，用无产阶级自己的新思想、新文化、新风俗、新习惯、来改变整个社会的精神面貌。在当前，我们的目的是斗垮走资本主义道路的当权派，批判资产阶级的反动学术权威，批判资产阶级和一切剥削阶级的意识形态。

ラジオ局アナウンサー（原資料）：『中国共産党中央委員会 プロレタリア文化大革命についての決定』（一九六六年八月八日採択）

一、社会主义革命の新たな段階

いま繰り広げられているプロレタリア文化大革命は、人々の魂にふれる大革命であり、わが国の社会主義革命発展のより深く、より広い、新たな段階である。毛沢東同志は、党の第八期中央委員会第十回全体会議で、およそ権力を打ち倒そうとすれば、まず世論を作り出さなければならず、まずイデオロギーの分野における活動を行わなければならない、革命の階級もその通りであるし、反革命の階級もその通りである、と述べた。実践が立証しているように、毛沢東同志のこの論断はまったく正しいものである。ブルジョア階級はすでに打ち倒されたとはいえ、彼らは搾取階級の旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣によって大衆をむしばみ、人々の心を征服し、何とか彼らの復活という目的を遂げようとして努めている。

プロレタリア階級はその正反対であって、必ずイデオロギーの分野におけるブルジョア階級の全ての挑戦に真っ向から痛撃を加え、プロレタリア階級自身の新思想、新文化、新風俗、新習慣によって社会全体の精神的様相を改めなければならない。当面の我々の目的は、資本主義の道を歩む実権派を闘争によって叩きつぶし、ブルジョア階級の反動的学術権威を批判し、ブルジョア階級とすべての搾取階級のイデオロギーを批判することである。

57

王晶焄：当時反正是、当时是、那就是、那是这个这个…北京は到处…到处杀人。

王晶焄：当時の北京は、当時は、もう……北京ではあちこちで殺人だった。

58

(北京外国语学校 党支部书记 汪璧)

(北京外国語学校、党支部書記、汪璧)

初三2班の学生看我管我们，怎么管呢，就是天天拿着皮带到我们屋子里，叫我们早请示晚汇报，向毛主席磕头鞠躬的，然后就是抽嘴巴，拿皮带打。

汪璧：中学3年2組の学生が我々の監督だった。どうするかというと、毎日、革のベルトを持って部屋に来ては、朝の礼と夜の報告をさせる。毛主席に頭を下げるあれだ。それから文句をつけては革ベルトで殴るんだ。

59

(原北京35中学生 潘士弘)

(もと北京35中の学生、潘士弘)

一个老太太的地契抄出来了，就被打死了。打死了后学生还有点害怕，结果就开会，江青、谢富治就说，谢富治是公安部部长就说，这是老太太藏变天账，责任自负。红卫兵造反没有任何责任。这话一说，一下子北京那就打，北京打死的人比任何一个城市都多

多，是最严重的。

潘士弘：ある奥さんの土地契約書が出てきて、それで殴り殺された。殺してから学生も恐ろしくなったが、会議があって江青と謝富治が話した。謝富治は公安部の部長だ。「この女は自業自得であって、紅衛兵の造反には何ら責任はない」と言った。この話ですぐに北京中が暴力だらけになった。北京は殺された人が全国一多く、最もひどかった。

60

汪璧：两个学生把我叫到一个小黑屋里，就是（楼道）靠北朝南的有个小黑屋，就问我多少岁，我四十多嘛，后来就拿皮带抽了我四十四下。

汪璧：2人の学生が私を暗い部屋に行かせた、北側で南向きの暗い部屋だ。何歳かと聞くから、40過ぎだと言うと、革ベルトで44回も殴った。

61



潘士弘：我回到我们原来的中学35中，是15条人命，学校内部，外边不知道。学校有个楼的五楼是音乐教室，现在马上拆掉，怎么在那屋子里打死了13个，还有两个人一进屋看到这么对尸体，趁红卫兵不注意就跳楼了。那个时候北京每个中学里外算，大概都在5—10条人命。

潘士弘：もとの35中学に戻ったら、外はわからないが、学内だけで15人殺されていた。建物の5階に音楽室があった、もうすぐ毀されるが、どうしたことが、そこでは13人も殺された。ほかに2人は部屋に連れてこられ、死体を見ると、紅衛兵のすきに建物から飛び降りてしまった。当時の北京はどの中学でも、5～10人は殺されていた。

62

(在北京六中紅衛兵设立的监狱中用人血涂描的标语)
(北京第六高校紅衛兵が設置した監獄内の、人血で書かれたスローガン) [次号につづく]

史料復刻

東京大学都市工学科全共闘アピール資料

闘いの原点 (1968年11月9日、青年都市計画研究者連合)

技術者としての生き方 東大闘争中間総括 (1969年4月、都市工学科68全共闘)

解題・前田年昭

〔解題〕文化大革命における下放は世界の青少年の生き方に影響を及ぼした。日本では全共闘運動が起こり、学生や教育者、研究者が、何のために学問をするのか、誰のために生きるのか、を真剣に問い直した。ここに紹介する東大闘争の都市工学科全共闘の文書もそのひとつであり、「技術者は、人民の側に立つのだという主観的願望に矛盾した形であらわれてくる自己の客観的役割をみつめつつ、それにもかかわらず科学技術の研究をやり、開発をやっていくという自己の存在を批判的に検証しながら、社会総体に対する絶えざる闘いの炎を燃やしていく必要」を訴えている。福島第一原子力発電所の事故は、科学技術至上主義への根底的問いかけを再びたびたび顕在化させたが、科学や技術、学問の性格と目的は繰り返し問い続ける必要がある。

闘いの原点

1968年11月9日、青年都市計画研究者連合

都市工学科大学院においては、四月以来学科内で独自の運動を展開し、この闘いをふまえ六・一五本部占拠後には、東大闘争を積極的に闘ってきた。以下に掲載するものは、都市工学科教室を具体的対象として、四・一三、一〇・二五、一〇・三〇と三度にわたって闘われてきた委託研究問題公開討論会の成果をもとに、都市工学科大学院ストライキ実行委員会情宣部がまとめた報告である。他の系、学科での闘いに役立てられんことを望む。

1 現状、その問題点、矛盾

都市工学科の研究者活動のほとんどを占める委託研究は、それ自身が内包する矛盾の故に、都市工学科における研究、教育体制に必然的に暗い影を落としている。ここで委託研究そのものの持つ矛盾について簡単に述べれば、

1、結論があらかじめ決っている。2、研究の枠組(前提条件)があらかじめ決っている。3、委託主体の立場

からのみ問題を汲み上げ、その立場に立って行わねばならない。4、データ、研究成果公開の原則を踏みにじる——などの諸点をあげることができる。このような委託研究に振り回される研究室の研究は必然的に現状肯定イデオロギーに犯され、研究と同時にそれを担う若手研究者をも腐敗、墮落せしめる。そして講座制研究室の枠は、慣習の圧力によって院生による自主研究の権利を名目に変える。委託研究の魔手は教育体制にも及ぶ。学生、院生の演習、卒論、修論におけるテーマが無批判に委託研究から横すべりの設定せられ、教官にとっての単なるお荷物として「指導」されるのである。

2 教官層のイデオロギー

かくの如き大きな矛盾をはらんだ委託研究に、何故に、われわれの度重なる批判に答え得ずしてなお励むのか？ 彼等の論拠を示せば

1、研究費が少ないため委託研究という形でやらざるを得ぬ 2、「社会の要請」に答えるという社会的責任を果たすと共に、研究を実社会に現実化する、積極的意義を持つ。——という二点に大きく集約できる。1について言えば、委託研究にも良いものと悪いものがある。だから良い委託研究はやるのだというふうの問題をはぐらかす。この「良い委託研究」と彼等が言う時、委託研究という形でしか研究をなし得ない自己の存在と全く無関係に「真理を追求する良い研究」が存在し得るということが前提されている。それ故に彼等はわれわれの批判に対して「委託研究の数を減らしたら」といった質から量への転換を計ったり、「教育と委託研究とを切り離したら」といった全く教育の理念(一体、教育と研究を分離して考え得るのか!)を無視した言葉を吐いたり、「公私混同をしない」という全くナンセンスな言いのがれをする。そして彼らの論理が破産を宣告されるや「各人様々な研究へのアプローチがある」といった一見、民主主義的な発言でもって、自己の欺瞞的研究態度をおおいかくすのである。教官層とはまさに委託研究を大学において

自主的に推進するという社会的要請に答えるものとして存在しているのだという事が明らかになったのだ。産学、官学共同路線は彼らの「好み」によって維持されているのではなく、産官学共同に答えるものとしてあるのだという認識の上に立ってはじめて、彼等があくまで委託研究をやめない事実が理解できるであろう。

2 について言えば、「社会からの要請」なるものが問われねばならない。産官学共同をまさに「主体的」に推進している教官が、自己の存在と全く切り離した所に設定する客観的な社会的要請とは何か？ 体制ベッタリの人間が体制の要請を請負い、体制の側からの都市計画を住民に押しつける、その押しつけに「東大」という権威を与えることなのだ。かく考えるとき、われわれは学問研究の存在被拘束性を明確に認識しなければならないだろう。「学問研究は真理であり、超階級的である」という既に乗り越えられた思想にしがみつくと教官を徹底的に批判していくと共に、われわれ自身、「科学技術者の主観的願望と客観的役割との矛盾と、それにも拘らず科学技術を開発する自分の分裂を見つめ科学技術者の存在を批判的に検証し、その矛盾を根本的な所までおし進めてとらえる事こそが意識的に追求されなければならない（「民科の破産とわれわれの出発点」—「創造」1号）」と言えよう。

3 我々の立場

闘争を主体的に生きようと決意するまでのわれわれは、自己に対する告発を自ら放棄することによって、客観的構造に規定され自ら「権力」と「社会的収奪」とを再生産してきた。このようなわれわれ自身を根底的に否定しようとするところからわれわれの運動は始まったのであり、この否定を貫徹するためにこそ、運動は続けられねばならない。そしてそれは、主体性さえ体制側に盗まれている現代において、真に主体を確立していくための永続的な否定であり、厳しい相互批判であり、たえざる異議申し立てである。われわれは自己にかけられた網の中で、体制から要請され、意味づけられ、そしてそれを自主規制的に受容してきたところのものを最前提とはしない。こうした自己否定的契機なしには主体性など語れないし、ましてわれわれ自身の技術論も運動論も構築しえないのだ。

従って我々は、「都市計画」を所与のものとは考えない。一方教官層が積極的に人民大衆の自治を破壊する政府ブ

ルジョアジーの政策に加担していることに無自覚であり、講座制がこれを支えている現実にあっては、都市計画を告発し徹底的に批判し得る者は我々をおいてない。そのためにこそ我々は、最低限の物質的保障を要求したのであり（九・一〇学科国交一院生室に関するもの）、それを物質的基盤としつつ院生権力を樹立し、運動実体を構築し、永続的闘争を展開しようとするのだ。「都市計画批判」を志向する我々は、変革としての都市計画、それも相対的変革の物的一象面としてのそれに重大な関心を持つ。従って研究者として人民の立場に立つか資本の立場に立つかは彼が主観的・恣意的に選ぶところではなく全人民的階級闘争の力関係に基本的に規定されるものであると考える。その意味で我々は我々の闘争の環を広く社会にひろげていかねばならないし、しかもそれは階級闘争から逃亡した地点において、プチ・ブル意識にとっぴり浸ったまま、「職能確立」「権利宣言」などを叫ぶことでもなければ、被害妄想狂的に「技術者は疎外された存在である」などと語ることで満足してしまうこと（救い難い加害者意識の欠如、はるかに深い疎外に落ち込み、技術者の日々の実践そのものがその疎外を増々深めていくところのプロレタリアートのことなどキレイサッパリ忘れていること）でもなく、まさにぼう大な人民大衆の根底的・全人格的解放の闘いの一環として、従って特殊な存在としての「技術者」を我々が止揚し、我々自身の真の全体性を獲得していくものとしてあらねばならない。かかる闘いを展望しうる運動を現在の保障していくための組織論が今我々に必要とされている（青医連は、このような我々にとって貴重な示唆を与えてくれた）。

階級社会において人民抑圧の道具として、全社会的な疎外を増々深めつつある「技術」の歪められた姿と、それを支える物質的基盤を見事に忘却して、単純肯定的・技術至上主義的賛美にふける（「技術の進歩は国のため、国民のため」等々）研究者、技術者の圧倒的に多い現状を、我々は痛苦な自己批判をもって否定的に総括せねばならない。それは理工系の大学院生の運動を如何に拡大して行くのか、という課題に答えていくことでもあるだろう。「技術」の現状を、我々は都市計画分野においてみつめ、その根底的批判の必要性を痛感し、そのために大学における自己権力の確立を欲した。従って我々の闘いは、それへ向って闘いうる実体の構築であり、かつそのような闘争拠点の獲得と主体的研究修得のプログラムの創造な

のである。かかる闘争拠点が多く、学科、専門課程において構築される過程で、新たな技術論と、従って技術者運動論とが創造されるであろう。またこのことなしには我々自身の現在の闘いも究極的には、貫徹されえない。そのためにも、我々は東大闘争を最後まで闘い抜かざるを得ないし、また逆にかかる闘いの質を獲得して行く闘争とは、まさに終りのない、永続的な闘争に他ならない。我々にとって東大闘争を貫徹するとは、このような意味を持つものである。

『進撃』1号、1968年11月1日、東大闘争全学共闘会議事務局編集委員会]

技術者としての生き方 東大闘争中間総括 1969年4月、都市工学科68全共闘

序文

昨年1月医学部がストライキに突入して以来1年3ヶ月余りが経過し、東大構内にも再び春が訪れて来た。銀杏も青葉を茂らせ、そこには教官諸氏が待望してやまなかった“平穏たる秩序”が一応回復しつつある。そして大学はまた旧態通りの研究・教育活動に舞い戻り、“古き良き日常性”の中に浸り込んで、東の間の悪夢を一刻も早く振り払わんとしているかにみえる。

ここにおいて我々は、東大闘争の過程で何が問われ何を告発してきたのかを再度捉え直し、またこの間の我々の貴重な“体験”を単なる体験として止める事なく“経験”の域にまで高めるための（それは今後の我々の実践活動によってのみ保証されるものであるが）充分な総括が必要であると思う。それによって東大闘争の質を更に深化させると共に、永続的に続くであろう東大闘争を担う内実をもった主体の形成と運動体の確立とが可能となるであろう。

これまでの東大闘争を振り返って考えてみる時、まず第一に我々の上に大きくのしかかってくる問題は、我々が大学を卒業して技術者になることは如何なる意味を持っているのか、また我々が技術者であり続けながら今後も体制の変革を目指した運動を継続していくことが出来るだろうか、それと今まで言われてきた自己否定とはどのように結びついてくるのだろうかという事であった。

この非常に重い問いに対して、いくらかでも答えるた

めに、ここでは“技術者としての生き方”をテーマに掲げ、技術とは何であり、技術とは如何なる役割を果しているのかを、考察してみたい。そして更に東大闘争を永続的に推し進めるためには如何にして運動体を形成していくのか、またそこにおいて我々は何をなすべきなのかを三章に分けて述べてみようと思う。

第一章 我々は技術者としての道を選ぶべきか

現在の資本主義社会の中において、技術者たり得るという事は如何なる意味を持っているのかと言えば、それは貧困にあえぎ、部品化の中で疎外されている多くの労働者・人民の存在を前提として初めて可能だということであり、技術者としての権利要求はいわば資本主義的特権の上に成り立っていると言えるであろう。

しかし技術が、何よりもまず生産的实践（人間の自然及び社会に対する働きかけ）において成立するものであり、生産上の目的にかなった自然法則のある部分を対象とする限り、技術は体制の巨大なメカニズムの中に完全に組み込まれてしまう。なぜならその生産上の目的なるものは、所謂社会の要求としてそれぞれの社会体制・経済体制によって大きく規定されてしまうからである。従って資本主義体制においては、生産上の目的は資本の要請としてあらわれ、常に資本の利益が優先し技術の開発・使用も生産手段を握っている資本家の側で決定されてしまうのである。

例えば、生産を増大させ産業発展に役立つ技術開発の進歩に比べて、安全設備の立ち遅れが目立ち、産業の発展の結果生じている公害の問題がなおざりにされて、煤煙防止技術・汚水処理技術などが未だ未熟な段階である等々はこれの良い例である。このような状況の中において、技術者はわずかばかりの特権を与えられながら専門分化された“一研究部品”としての役割を担わされているのである。日常研究に勤しみ技術を開発する事によって、技術者は資本主義体制を下から支え人民支配機構の強化に一役かっているのであり、それ故労働者・人民に対しては加害者の立場にあるのだ。

それでは我々は技術者になる事を拒否すべきなのか。

これに対する答えは“ノン”である。その理由を2つほど挙げて論じてみよう。

第一に我々は何のために運動をする必要を感じているのであろうか。それはつきつめて言ってしまうえば、すべ

ての人々が人間らしく生きられる社会を創り出すためである。そのために“あらゆるレベルにおける様々な形態の闘争”を永続的に展開していく必要がある訳だけれど、その中で、技術がある程度武器として使えるのではないか。即ち専門家の場合には、その職能を通して問題と取り組む方法がかなり有効なのではないかという事である。

例えば、公害の問題を取り上げてみよう。

明治以来、日本の産業資本は世界でも類のない急速な発展を遂げてきた。それを支えてきたものは、労働者の低賃金労働による搾取などと共に、保安投資の節約・固定設備（福祉施設、公害防止装置など）投資の無視などによる資本の高度蓄積であった。戦前においては、足尾・別子銅山の鉱毒事件などのように桁外れて大きな社会問題となったものを除いては、大部分が公害として意識されずに潜在化したままであった（その理由としては、住民の意識の低さ・軍国主義による運動の弾圧と私企業の利潤追求による富国強兵政策・都市問題の矛盾の農村への還元^{〔ママ〕}など様々に考えられるが）。しかしながら、戦後特に1950年代の後半からは高度成長政策と相まって、今までとは比べものにならないほど爆発的に公害が発生して一気に顕在化し、国民生活の上に目に見えて大きな支障をきたすようになってきたのである。このような公害の責任の多くは、安全性や公害の問題を無視してもっぱら利潤追求と資本の蓄積とに専念してきた私的企業と、国民の安全・福祉を忘れ独占資本優先の政策をとり続ける国や自治体にあり、正に資本主義体制そのものに根ざしたものである。この基本線を見失うことなく、公害絶滅のために闘う必要があるが、しかしそれを繰り返すだけでは公害対策は資本主義打倒以外にはあり得ないことになってしまって、現在起っているあるいは起りつつある公害に対して有効に対処する手だてを失ってしまう（ただこの辺は、公害防止のための技術が公害発生の本質を隠蔽したり、更には公害防止装置が資本の採算ベースにのって資本主義を富ませ生き延びさせる効果を及ぼす結果にもなり、難しい問題ではある）。たとえば水俣病やイタイイタイ病における医師をはじめとした多くの科学者・技術者必死の追求の結果、原因が水銀やカドミウムにあることがはっきりし、企業や国の責任が明確になったことや、沼津・三島コンビナート設置反対運動において技術者が大きな役割を果たしたことなどの例を見る時、技術によって問題の本質的解決をはかることは出来ない

ながらも、運動の中において常に問題を人民の側に提起し、本質を解明・暴露していくことによって運動体に科学的根拠を与え、更に運動を強化するという役割を技術者は果せるのではないかと思うのである。

第二の理由は、技術者が自己の権利要求を放棄し、技術者たる事を止めることによって、現在の多くの人々が抑えられ疎外されている状況を止揚することは出来ないと考えるからである。

それではその止揚はいかにして可能なのであろうか。それは技術者が、自らもこの社会においては公害に苦しみ、抑圧され搾取され疎外されている人々と全く同じ状況にあり、その意味において技術者も人民の一員であることを自覚することである。技術者に与えられたわずかばかりの特権も、独占資本の人民支配のための道具であり、技術者を資本に奉仕させるための手だてにすぎないことを認識して、あくまで人民としての権利を主張していくことであろう。更には、技術者の主観的意図とは別の形であらわれてくる客観的役割を正視し、技術者としての矛盾した存在を常に批判的に検証しその矛盾を根本的なところまで追求する姿勢をとっていくことが必要だろう。

人民の一員としての自覚を持たない技術者の加害者意識は、そこに救うべき対象としての人民・労働者を設定し、それに触発された形での自己犠牲の意識を生み出す危険性を伴っているのである。自ら研究者である事に負い目を感じて技術者たることを止めてしまったり、何故自分が犠牲にならなければいけないのかという疑問から運動を放棄してしまうという誤った方向を自己犠牲の意識によってとり易いのである。

以上技術者として、ある程度運動をやっていく可能性があるのでないかということを探ったのであるが、そこにはあまり展望はない。しかし我々はまずもって技術者になるのだという決意を固めてその中で出来る限りやってみるしかないように思われる。そのような前提の上に立って初めて、技術者運動論が語られてくるのである。

第二章 技術者の果すべき役割とその姿勢

我々が技術者になると決意した時、それではいかなる形で運動にかかわっていくべきなのだろうか。また技術者とは何であり、その果すべき役割とは何であらうか。

東大闘争の過程において告発されたものの一つに、研究者・教育者の姿勢とその役割の犯罪性があった。それ

まで言われてきた言葉は「学問・技術は中立である」「大学は政治活動の場ではない」「学問・技術は良いのだが、それを使う社会が悪いのだ」といったものであった。このような「学問の中立」イデオロギーを裏打ちするものとして国大協自主規制路線があり、“守られている大学の自治”の幻想の下に、自らが自分自身の研究にどのような形で関わっているのか、自らの研究者としての立場とは如何なるものなのかを検証することなく“タコソボ的な研究”に埋没していた研究者そのものが東大闘争で問われてきたのである。

当時的大河内総長は、我々の入学式の告示の中で「大学は学問研究の場・真理探究の場であり、理性の府である。学問・科学は政治的イデオロギーに左右されるものではないから、学内への政治の持ち込みを許さない。構内における政治活動は許可しない。デモをやりたいかったら本郷三丁目に行ってやりなさい。」といった主旨の発言をして、“教育者”として学生の政治活動を戒め、大学内の“平穏なる秩序”と“研究の自由”を守るという姿勢を示した。学生の処分、学生のストライキの禁止、機動隊の導入といった一連の行動はこの姿勢を貫くためのものであった。しかし我々は医学部における闘争、機動隊導入などによって、学生の運動を抑えつける一方においてどのような政治イデオロギーがそこに貫徹しているのかを知ってしまったのである。即ち、インターン制度・登録医制度に反対し、医学及び医療体制の反人間性を告発しつつ厳しく真理の探究を行ってきた青医連の運動に対して、団交拒否・処分・機動隊導入でのぞんだ医学部および大学当局は、一方において政府と結託して医療の再編・合理化を推し進めてきたのであったし、自らの創造的で自由な研究活動を目指した学生の運動に対しては、大学の自治・学問の自由を守るという形で規制する一方において、委託研究を代表とする産学・官学協同路線が貫徹していたのであった。しかも前に述べたように、技術や産学協同などという形を通しての研究は、ある生産上の目的を媒介としている故に資本の要請に見合ったものが追求され、意識せずとも簡単に体制に包摂されてしまう。従って科学（技術）至上主義に陥ることによって日常的な研究活動に浸り込んでしまうのは、客観的情況の中では体制の側に組みし、人民に対しては加害者の立場に立つことになるのである。

以上「学問は中立」なる言葉の欺瞞性を若干述べた訳

だけれど、一言付け加えるならば、日常的研究に埋没していた研究者を研究室からたたき出すことによって、そのような問いを発した封鎖に対しても“他人の研究の自由を犯す権利があるのか”とばかりただ単に「封鎖を解け！」としか叫ぶことの出来なかった教官達に対しては失望の念を禁じ得ない。

それでは技術者とはいかにあるべきなのであろうか。

技術が人間の自然及び社会に対する生産的実践の場において成立する限り、そこにおいては技術者がいかなる立場に立っていかなる方向性をもって技術を行使用するかという主体性の問題と、技術を行使した結果が客観的情況の中で彼の意図したものと相違した役割しか果せない時に、その客観的情況を彼が如何に克服していくのかという問題を常に目的意識的に追求していく姿勢がひとつの要となる。これについて武谷三男氏は、「技術は実践概念であり、その本質は生産的実践における客観的法則性の意識的適用である」として技術者の主体性を問題として上げ、更に続けて「独占資本の利益が、人民の利益に優先して科学技術を支配し、科学・技術体系を歪めつつある現在、技術者は“資本の側・利益の側”に対抗して“人民の側・安全の側”に立つ必要がある。」と述べている。

武谷氏が、技術は単独で存在するものえでなく、技術者の主体性とかからめた形でしか論じられないと指摘し、しかも技術者は人民の側・安全の側につくべきであると述べている事は正しいと思う。しかしながら、我々は更にもう一步進めて考える必要がある。即ち技術者がいくから人民のため、安全のためと考えて研究しようとも、現在の資本主義体制にあってはそれを見事に資本の側が収奪してしまい、独占資本による人民支配のための技術の発達に手をかけてしまう結果にしかならないという事である。結局、技術者として人民の側に立つのか、資本の側に立つのかは技術者が主観的・恣意的に選び得るものではなく、その時の社会における資本（権力）と人民との力関係、全人民的階級闘争の力関係とでも言うべきものによって規定されてくるのである。従って技術者は、人民の側に立つのだという主観的願望に矛盾した形であらわれてくる自己の客観的役割をみつめつつ、それにもかかわらず科学技術の研究をやり、開発をやっていくという自己の存在を批判的に検証しながら、社会総体に対する絶えざる闘いの炎を燃やしていく必要があるだろう。このような体制変革の闘争を担うという自覚と実践がな

い限り、技術者の権利要求は自己の立場を守り、特権を拡大する方向にしか作用しないであろうし、そのような技術者は墮落し、独占資本主義の巨大なメカニズムの中の細分化された一部品へと成り下ってしまうのだ。

ここで再度東大闘争で語られた言葉を繰り返しておこう。

「聖職者意識を加害者意識に転化せよ！」

第三章 如何にして運動を進めて行くのか

前章では、技術者の主体性や主観的願望では克服し難い状況を変革して特に運動を展開する必要性を述べたが、それではその運動体を如何に形成し、どのような形で進めていったらいいのかを次に論じてみよう。

再度、公害を例にとって話を進める。

最近の公害の爆発的な発生に伴って、住民の公害に対する意識も高まり、公害追放の運動が各地で起ってきているし、すべての人々が感性的にせよ公害をなんとかしなければいけないと考え始めている。公害対策に真剣に取り組み、公害現象の本質を明らかにするためには、公害による損失とその因果関係を具体的に明らかにすると共に、公害の被害の実態やその防除・救済に関して更なる住民の関りを結集した有効な住民運動を組む必要がある。(現代の公害は、様々な因子が複雑にからみあって発生しているため、その原因究明・防除は困難をきわめ高度の幅広い分野の科学が必要とされる。従ってそこでの技術者の役割は大きく、様々の分野の専門家が自己の狭い専門技術の枠を越えて協力し合い、総合的見地から公害を追求していくことが大切である。) 現在の資本主義体制における様々の矛盾が公害としてあらわれ、その大部分の責任は私的企業および国・自治体にある。

しかし資本主義体制における私企業は、利潤の追求というその本来の運動法則に従って行動する以外には自らを存続させる方法を知らない故、私的資本としての一定の限界をもっていて利潤採算に見合う範囲で公害対策を講ずるのが関の山である。私企業がその良心に従って公害防止にのり出すことなど期待出来ないし、企業自体にそれを要求する運動を組んでもそれは私企業にその存立基盤たる資本主義の止揚を要求するものとなるから有効な闘争とはなり得ないだろう。

従って、住民の意識を結集して作られた運動体の方向性としては、自治体は自分達が立体的に運営していくんだとの意識の下に、「三割自治」の名で呼ばれる国と自

治体との力関係を実質的に逆転させ、官僚主義・民間企業追随主義・対症療法主義などによって公害に対する有効な対策をとり得ないでいる国に、住民の生活を守る立場に立った強力な公害政策を実施するようつき上げることであろう。だが、国がその基底をなす資本主義体制を超越した行動をとることも、企業の場合と同じようにあまり考えられないから、住民運動は公害防止を自治体・国に要求するという形では十分な成果を得られないかも知れない。しかし運動に対する障害がどこであらわれ、いかなる組織や力が住民の要求に対して邪魔になっているかが明らかになることは、住民が体験を通じて公害現象の本質を学びとる機縁ともなり、更には資本主義体制そのものの打倒までも目指した反体制運動への飛躍の第一歩となろう。

たとえ、住民運動のある局面において、一定程度の勝利を獲得したとしても、そこにとどまってしまつて更に運動を展開しない限り、その勝利も再び権力の側に剝奪され体制に利用されてしまうであろう。人間が人間として生きる権利を究極的に保障する社会体制をわがものとしないう限り、その危険性は常に存在するのであり、かくなる社会体制を目指しての永続的な闘いが必要とされる。

最後に組織に関する問題点を少し述べてみたい。

我々が権力・資本に抗して闘う場合、それが有効な闘いとなり得るためには出来るだけ多くの人々を結集した運動体を組織する必要がある。しかし、一たび組織が出来てしまうと組織の維持・強化が第一義とされ、運動体本来の精神や方向が見失なわれ、運動体の官僚化・質的低下を招くことは過去の多くの組織の例を見れば分る。それをいかに克服して、組織を構成している人達が常に新たな感覚で問題を提起して組織を浄化し、運動を強力に推し進めて行くことが出来るのかは今後の大きな課題である。

それには一つ、その組織の中で指導的立場にある人々の能力とバイタリティと信念によって大きく左右されてくるであろう。即ち運動体を組織し、強力な闘争を組んでいくためには、有能な指導者を必要とする。技術者が、その指導者たり得るか否かは一概に言えないが、少なくとも我々はそれぞれの場所にあつて運動体の核となり、闘争をすすめていくのだとの決意をもつ必要があるだろう。

〔2文書とも、現代技術史研究会『技術史研究』No.85、2017.12.12からの孫引き〕 ☆